

薬用植物栽培における課題と今後の展望

宮崎県総合農業試験場薬草・地域作物センター

杉村和実・吉田勝一郎・濱田保典¹⁾・郡司定雄

(¹⁾元 宮崎県総合農業試験場薬草・地域作物センター)

はじめに

近年、健康に対する意識の高まりなどを背景に薬用植物が注目を集めている。医療現場でも薬用植物等を原料とした漢方薬の有用性が評価されており、漢方製剤等の市場規模は拡大傾向で推移している。厚生労働省の調査では、2012年の生産金額は1,519億円で、2006年に比べ約30%増加している(図1、「薬事工業生産動態統計年報」から)。

しかし、漢方薬の原料となる生薬の国内自給率は約12%に過ぎず、多くを中国からの輸入に頼っている(日本漢方生薬製剤協会調べ)。最近、世界各国で需要が拡大し、一方で資源保護の動きが強まっていることから、価格の高騰や生産国の輸出制限など必要量の確保が厳しくなっている。実際、中国から輸入された原料生薬の価格は上昇し続けており、2006年を100とした価格指数は2013年に213で、7年間で2倍を超える値となっている(日本漢方生薬製剤協会調べ)。

そのため、農林水産省と厚生労働省、日本漢方生薬製剤協会が主催する「薬用作物の産地化に向けたブロック会議」が全国各地で開催されるなど国内生産に向けた動きが活発化してきている。

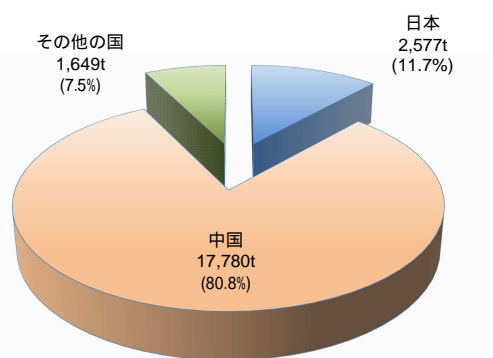


図2 原料生薬の使用量と生産国(平成22年度)
資料: 日本漢方生薬製剤協会調べ

国内栽培における課題

このような情勢を受け、全国各地で薬用植物の栽培が取り組まれ始めている。しかし、生薬原料の国内生産には

- ・他の農作物のような一般的な取引市場がないため、漢方薬メーカー等との契約栽培が必要である
- ・「日本薬局方」に定められた品質規格を満たす必要がある

などの条件がある。また、栽培する上でも、

- ・使用できる農薬がない、もしくは少ない
- ・専用の農業機械がない

などの課題がある。特に、どのような病害虫が発生するか不明なものが多く、今後問題となることが想定される。1例として、サツマイモネコブセンチュウが多く生息する土壌を用いてガジュツ()を栽培したところ、地上部の生育、収穫部位となる根茎の重さも、対照区に比べて線虫区で著しく劣る結果となった(図2)。

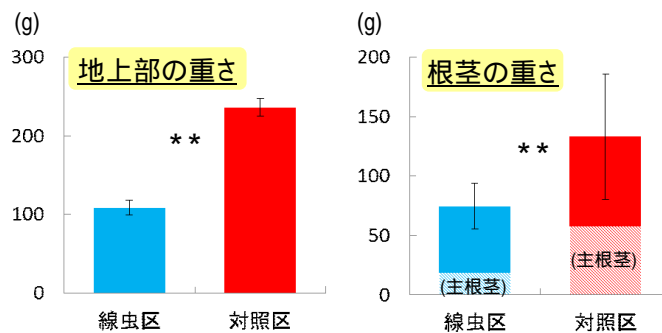


図2 収穫時(試験開始100日目)の地上部と根茎の重さ
注) **は $p < 0.01$ で両区間に有意差あり(Mann-Whitney's U検定)

ショウガ科ウコン属の植物で、利用部位は根茎。生薬名は莪朮(ガジュツ)で、効能としては芳香性健胃が知られる。(「日本薬草全書」から引用)



図3 ガジュツの画像

今後の展望

本試験により、サツマイモネコブセンチュウが生息するほ場でガジュツを栽培する際は、センチュウ対策を講じる必要があることが分かった。対策としては農薬が最も効率的で効果的と考えられるが、野菜などで使われる土壌灌注剤や粒剤など主要な農薬はガジュツでは使用できない。

このように、薬用植物の栽培にはいくつか課題はあるが、漢方製剤だけでなく健康食品やサプリメントなど様々な用途への広がりも期待される。当センターとしても、センター内での試験だけでなく、現地でもいくつかの植物について試験栽培を始めている。全国でも珍しい農業試験場として薬用植物を扱う機関という特長を活かし、製薬メーカーなどから需要がある薬用植物について宮崎に適した栽培方法の確立につなげるべく取り組んでいきたい。